OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	小学1年生の「文章力」に与える年上きょうだいの影響
Author(s)	前馬, 優策
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2019, 45, p. 147-161
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71838
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

小学１年生の「文章力」に与える年上きょうだいの影響

前　馬　優　策

目　次

１．はじめに
２．きょうだいと教育達成についての研究
３．研究方法
４．分析結果
５．おわりに

小学 1 年生の「文章力」に与える年上きょうだいの影響

前 馬 優 策

1．はじめに

本稿の目的は、小学校 1 年生の作文の産出量に対して、年上きょうだいの存在が及ぼす影響を明らかにすることである。

小学校への入学は、子どもにとって（そして親にとっても）、ライフステージの初期における重要な移行である。子どもたちは、幼稚園・保育所の文化から学校文化へ、そして家庭文化から学校文化へ、劇的な移行を遂げなければならないのである。中でも、文字の習得は、学校文化を象徴する行為である。入学直後の「ひらがなを習う」ことに限らず、「新出漢字」という形で文字の習得は続く。言うまでもなく、学校での学習において「書く」ことは不可欠であるし、学校適応にさえ影響を与える可能性があるだろう。また、小学生に対する調査から、見て覚えるよりも書いて覚える方が記憶に残りやすい（仲 1997）といった、「書く」ことによる波及効果も存在する。

しかしながら、学校で一から教わるとは言え、その習得状況には子どもによって大きな偏りがあるし、そもそも、就学前にひらがなの読み書きをしているかどうかもかなりの程度差があると思われる。2008 年に Benesse 教育研究開発センターによって実施された第 3 回子育て生活基本調査によれば、幼稚園児・保育園児をもつ保護者の 8.4%が「ほとんど毎日」ひらがなやカタカナの学習を子どもとしているという。また、「週に 3 ～ 4 日」は 13.7%、「週に 1 ～ 2 日」は 29.0%であり、いずれも 2003 年と比べて増加している。一方で、「月に 1 ～ 3 日」は 21.9%（2003 年と同値）、「ほとんどしない」は 26.4%（2003 年は 32.8%）である（Benesse 教育研究開発センター 2009）。全体的に読み書きに対する意識が高まっているとみなすことができるが、この結果からも、読み書きに親しみのある子どもとそうでない子どもがいることがわかるだろう。

本稿では、ひらがなを習いたての小学 1 年生の作文の産出量について分析を行う。国立国語研究所（1964）によれば、「文字量の多少は、そのまま作文能力の価値的な意味を示さないともいえるが、文字を書く力、ことばをつづる力、文を組み立てる力、文章としてまとめる力というような作文の基礎的な能力の潜在性をはかる一つの手がかりとはなる。ことに、低・中学年の段階では、一定の記述量によって書こうとすることが書き表せるか否かが問題である」（国立国語研究所 1964、p.379）という。また、同じ課題で

作文を書かせた場合、文章の産出量は小学校低学年から高学年にかけて増加する傾向があり（国立国語研究所 1964、島村・新名主・米田 2004）、年次が進むほど作文能力も向上すると仮定すれば、文章の産出量は作文能力の習熟度合いを示す一つの指標であると言える。その意味で、本稿では、文章の産出量をその文字数でカウントし、「文章力」の一端として捉えることにする。

文章力は、その後の学力獲得にも重要になってくる。5 歳児から小学 1 年生までを追跡して語彙力や学力の調査を行った内田（2012）によると、「幼児期の語彙能力と書き能力（運筆運動の巧緻性の成熟度）は、小学 1 年生時の国語学力と語彙力の規定因」となっている（内田 2012、p.15）。同様に、韓国や中国でも「幼児期の書き能力（図形やひらがな文字の模写テスト；手指の巧緻性の査定）は小学校の国語学力に影響する」（内田 2012, p.15）ことが指摘されており、いかに文字習得をスムーズに終えることができるかは、重要な課題になってくるだろう。

先行研究では、幼児の書字能力（どのくらいの文字を正確に書けるか）には子ども自身の認知能力や家庭での書字指導（猪俣・宇野・酒井・春原 2016）、性別（太田・宇野・猪俣 2018）が影響を与えていると言われているが、本稿では、特に学校の文字文化と家庭を橋渡しする存在としての「年上のきょうだい」の存在について検討を行う。

「年上のきょうだい」の存在は、文字の習得に関してどのような意味を持つか。はじめに思い浮かぶのは、年上のきょうだいの存在が文字の習得を促すという仮説である。年上のきょうだいが使ったひらがな表が家の壁に貼られていたり、年上のきょうだいがいない場合に比べて、鉛筆や消しゴムといった筆記具がより身近になっていたりすることが想定される。しかし一方で、きょうだいが増えると家庭内の資源が分散したり、生まれてきた子どもに選択的に（不均衡に）資源を配分することで得られる資源が少なくなったりもする。そこで以下では、小学校の入り口である文字の習得と年上のきょうだいの関係について、いかなる説明が可能であるか、検討していくことにしよう。

2．きょうだいと教育達成についての研究

子どもは、生まれてくる時代や地域を選べないのと同様に、生まれてくる家族を選ぶことができない。そうした前提に対する問題意識から、子どもの地位達成や教育達成と「家族」の関係性について研究が進められてきた。しかし、「個人」の地位達成や教育達成を扱う際に、「家族」や「親」の属性が問題になることはあったとしても、家族「内」の異質性であるきょうだい関係が中心的な問題になることは少なかった。重要な偶発的「変数」であるにもかかわらず、日本の社会学的研究において、きょうだい関係が扱われてこなかったのである（近藤 1996、藤原 2012、苫米地 2013）。

本稿は、こうした問題意識を背景として、きょうだい関係が子どもの「文章力」に与える影響について検討しようとするものである。Harris（1998）が述べるように、子ど

もは親からの影響のみを受けて育つわけではなく、さまざまな社会関係の中で育つものである。いくら現代社会が少子化したとは言え、きょうだい関係は子どもにとって、重要な社会関係であろう。

従来、きょうだい関係に関する研究は、主に心理学の分野で研究が進められてきた。中でも、出生順位が発達やパーソナリティ形成に及ぼす影響を明らかにする研究が多かった。たとえば、ひとりっ子や末っ子の性格について検討したものはその代表的なものであるだろう（依田 1967、依田 1990）。一連の研究は、きょうだいが子どもに与える影響として、きょうだいどうしの直接的な影響と、親を通じた間接的な影響に分けて考えることができる。直接的影響として、たとえば、年上のきょうだいを真似することを通じて、新たなスキルの習得の手助けとなる（Barr & Hayne 2003）とか、年下のきょうだいに教えることによって、年上のきょうだいの言語力や学力が上がる（Smith 1993）といった形が想定されている。一方、間接的影響は、資源配分の問題（「資源希釈説」や「選択的投資説」といった形で説明されることが多い）とか、すでに子育てをしたことで、親が子育てに習熟し、それが子どもにも影響を与える（Shanahan et al. 2007）といった流れが想定されている。

さらに、社会学の分野で扱われてきた「きょうだい関係と教育達成」の問題では、きょうだい数が多くなると教育達成が低くなること（近藤 1996）、現代日本では出生が早いほど教育達成は高くなる傾向があること（苫米地 2012）、きょうだい数や出生順位の教育達成に対する負の影響は、収入が高ければ小さくなること（藤原 2012）が報告されている。こうした研究は総じて、きょうだい数が多いほど、また出生順位が遅いほど、教育的には不利になると結論付けることが多い。

しかしながら、教育達成に関わって、その「過程」できょうだい関係の影響が検討されることはこれまでのところなかった。たとえば、学校適応や学力獲得といったものに対して、きょうだい関係が与える影響について、私たちは何を知っていようか。

そこで本稿では、小学校入学直後の「文章力」ときょうだい関係について明らかにすることを試みる。小学校への入学は、子どもにとって重要な移行である。子どもたちは、幼稚園・保育所の文化から学校文化へ、そして家庭文化から学校文化へと移行を遂げる。その中でも、文字の習得は、その後の学校生活を大きく左右するものであろう。

本稿は、この入学時の「文章力」が、子どものきょうだい構成―とりわけ、年上のきょうだいの存在によって、どのように異なるのかを検討していく。いち早く小学校に入学したきょうだいがいる方が、「文章力」を身に付けやすいとも考えられるし、逆に、年上のきょうだいがいない方が、保護者から手厚く教育を受けることで「文章力」を身に付けることができるとも考えられる。また、藤原（2012）で示された交互作用、きょうだい関係の負の影響が高階層で小さくなるといったようなことが確認できるのかどうかについても検討を加えることにしたい。すなわち、「文章力」にきょうだい関係が影響を与えていた場合、その影響を大きくしたり小さくしたりする属性があるのかどうかについ

ても明らかにしたい。

本稿の構成は以下の通りである。続く３節で研究方法と本研究の具体的な課題について述べ、４節で分析の結果を詳述する。５節では全体のまとめと一連の結果をもたらす要因について考察を加え、本研究の限界や提起する課題について記述する。

３．研究方法

3-1. 調査の概要

本稿では、2007 年に筆者が実施した調査によって得られたデータを用いる。この調査は、大阪府北部の同一中学校区にある 3 つの小学校（A 小、B 小、C 小とする）の 1 年生児童およびその保護者を対象とした調査である。A 小は単学級の全員、B 小は 2 クラスの全員、C 小は 5 クラスのうちの 1 クラスの全員の協力を得られた。

まず、2007 年 7 月に保護者への質問紙調査を行った。質問紙の配布は学級担任を通じて行い、回収も学級担任を通じて行った。その際、あらかじめ質問紙にナンバリングを行い、厳封して提出してもらうことで、後に児童のデータと照合できるようにした。その後、夏休み明けの 9 月に自由作文を書いてもらった。作文は、「夏休みの思い出」、もしくは「運動会の感想」というテーマで、授業時間にマス目のある用紙に記述されたものである。

これらの結果、自由作文 92 名（全員）、保護者調査 87 名（回収率 94.6%）分のデータが得られた。

3-2. 変数の説明

本稿では、「きょうだい関係」と「文章力」の関係性について検討するが、それぞれの変数について、簡単に説明しておく。きょうだい関係は、保護者調査により「年上のきょうだい」か「年下のきょうだい」がいるか、という質問において把握した。したがって、どちらもいない場合は「ひとりっ子」、「年下のきょうだい」のみがいる場合は「長子」、「年上のきょうだい」のみがいる場合は「末子」、どちらもいる場合は「間の子」と定義することができる。きょうだい関係について検討する際には、きょうだい数、出生順位、出生間隔、性別構成などが、重要な要素となる。その意味で、本稿におけるきょうだい関係の把握は精緻さに欠けるが、今後の課題として、まずは分析を進めることにしたい。

続いて、本稿では、自由作文の文字数を「文章力」として、操作的定義を行った。ここでは、文章構成や誤字脱字等を問わず、とにかく多くの文字を書くということに重きを置く。文字を習いたての子どもも多い小 1 の段階では、多くの文字を書くという行為そのものが「力」として把握するに十分であると判断した。

その他、統制変数として、調査時の月齢、性別、保護者の職業・学歴・年齢を用いることにする。保護者の職業は、「主に家計を支えている方の職業」について尋ね、「専門・

技術職」「管理的職業」「事務的職業」「販売的職業」の回答を「ホワイトカラー」として、「技能職・労務」「運輸業」「保安・サービス」の回答を、「ブルーカラー」とすることにした。さらに、保護者の学歴は、短大卒・大学卒・大学院卒を「大卒」として、それ以外を「非大卒」として扱うことにする。得られた学歴の多くは母親のものであったが、父親による回答（3 名）も含んでいる。なお、こうした情報をすべて含んでいるデータは回収したうちの全てではなく、後半の重回帰分析では 70 サンプルをデータセットとして分析を行っている。

3-3. 本研究の課題

上記の変数を用いて、本研究では以下の 2 つの課題について検討する。

（課題 1）：年上のきょうだいの存在は、「文章力」を高めるのか。

この検討課題に対して、「文章力」を従属変数、きょうだいの有無を独立変数、本人および保護者の属性を統制変数とした、重回帰分析を行う。

（課題 2）：「文章力」に対するきょうだいの影響は、本人の性別や保護者の属性により異なるのか。

この検討課題に対して、（課題 1）を明らかにするために行った重回帰分析の後、保護者の属性および本人の性別ときょうだいの有無の交互作用項を作成し、それらを独立変数として投入してその効果の大きさを検討する。

4．分析結果

4-1. 単純な平均値の比較

最初に、きょうだいの有無ごとに見た「文章力」の平均値を確認しておこう。

表 1 を見ると、末子＞間の子＞ひとりっ子＞長子の順に「文章力」が高いことがわかる。端的に言って、年上のきょうだいがいる方が「文章力」が高く、年上のきょうだいがいない方が「文章力」が低いと考えることができるだろう。

さらに、その他の変数ごとに見た「文章力」の平均値についても確認しておこう。表 2 を見ると、4 － 6 月生まれは 77.7 字、7 － 9 月生まれは 77.6 字と、10 － 12 月生まれの 55.4 字、1 － 3 月生まれの 62.3 字よりも比較的多くなっている。また、男子よりも女子が（59.6 ＜ 81.5）、ブルーカラーよりもホワイトカラーが（59.4 ＜ 76.1）、それぞれ多くの分量を書いていることがわかる。一方、保護者学歴および年齢にも多少の差は見られるが、統計的に有意とは言えない結果となった。

表 1　きょうだいの有無別に見た「文章力」（文字数）

表 2　変数ごとに見た「文章力」（文字数）

これらの結果より、きょうだい構成に加えて、子どもや保護者の属性と「文章力」の

	n	平均値	標準偏差
ひとりっ子	22	68.8	24.5
長子	27	67.6	36.4
末子	23	76.4	37.1
間の子	10	73.3	40.0
合計	82	71.1	33.9

あいだに一定の関連が見られることが明らかになった。これらをふまえ、次項ではいくつかの変数を統制したうえで年上のきょうだいが与える影響について考えてみることに

		n	平均値	標準偏差	分散分析
生まれ月	4-6月生まれ	25	77.7	39.3	p<.10
	7-9月生まれ	27	77.6	38.1	
	10-12月生まれ	20	55.4	17.3	
	1-3月生まれ	18	62.3	26.2	
性別	男子	51	59.6	28.7	p<.01
	女子	41	81.5	35.1	
保護者職業	ブルーカラー	22	59.4	22.9	p<.05
	ホワイトカラー	52	76.1	36.1	
保護者学歴	非大卒	40	67.7	33.3	n.s.
	大卒	39	75.6	34.1	
保護者年齢	20歳代	9	53.4	17.9	n.s.
	30歳代	59	71.8	35.5	
	40歳代	12	68.2	26.5	

したい。

4-2. 重回帰分析の検討

それでは、（課題 1）「年上のきょうだいがいる場合、「文章力」は高まるのか」について検討を始めることにしたい。ここではまず、「文章力」を従属変数とした重回帰分析を行った。独立変数には、年上のきょうだいの有無を示すダミー変数、年下のきょうだいの有無を示すダミー変数、調査時の月齢、性別のダミー変数、保護者の職業を示すダミー変数、保護者の学歴を示すダミー変数、親の年齢を投入した。表 3 に分析に用いた変数の記述統計量を示している。

重回帰分析を行った結果は表 4 の通りである。統計的に有意だと判断できる標準化係数は、「ホワイトカラーダミー」の 0.35、「女子ダミー」の 0.27、そして「年上有ダミー」の 0.24 であった。つまり、「文章力」に影響を与えるものは、保護者の職業、子ども自

身の性別、年上のきょうだいの有無であると言うことができる。すなわち、保護者がホワイトカラー職に就いていること、女子であること、年上のきょうだいがいることが「文章力」を高めることにつながっている可能性が示唆されたわけである。10%水準であるとは言え、保護者の階層的属性や本人の性別を統制したうえでも、年上のきょうだいの有無と「文章力」の関係性は認められるのである。

表３　記述統計量

	n	平均	標準偏差	最小値	最大値
「文章力」(文字数)	70	70.1	32.41	24	196
年上きょうだい有りダミー(あり＝1、なし＝0)	70	0.4	―	0	1
年下きょうだい有りダミー(あり＝1、なし＝0)	70	0.5	―	0	1
月齢	70	81.9	3.29	76	87
女子ダミー(女子＝1、男子＝0)	70	0.4	―	0	1
ホワイトカラーダミー(ホワイトカラー職＝1、ブルーカラー職＝0	70	0.7	―	0	1
大卒ダミー(大卒＝1、非大卒＝0)	70	0.5	―	0	1
親の年齢(20歳代＝25、30歳代＝35、40歳代＝45)	70	35.4	4.64	25	45

表４　重回帰分析の結果（従属変数＝「文章力」：強制投入法）

	B	β	*p*
(定数)	-2.03		
年上有ダミー	15.45	0.24	+
年下有ダミー	-2.78	-0.04	
月齢	0.78	0.08	
女子ダミー	17.23	0.27	*
ホワイトカラーダミー	24.56	0.35	*
大卒ダミー	-1.80	-0.03	
親の年齢	-0.59	-0.09	
調整済みR²	0.124		
n	70		

+*p*<0.1, * *p*<0.05

4-3. 交互作用項の検討

続いて、(課題2)「年上のきょうだいの影響は、本人の性別や保護者の属性により異なるのか」について検討するため、年上きょうだいの有無と保護者属性・本人属性の交互作用について見ていくことにしよう。ただ、本分析ではサンプルが少ないため、十分な多変量解析を行うことができない。そこで、ステップワイズ法を用いて重回帰分析を再度行い、変数を再選択することにした。その結果、「ホワイトカラーダミー」「女子ダミー」「年上有ダミー」の3変数を独立変数とするモデルが得られた（表5のモデル1)。この結果は、前項で得られた結果と矛盾するものではないため、これらの変数以外の変数を加えずに分析を続けることにする。そして、この3変数に加え、「ホワイトカラーダミー×年上有ダミー」と「女子ダミー×年上有ダミー」を加えた結果を検討した。

表 5 のモデル 2 は、ホワイトカラーダミー、女子ダミー、年上有ダミーに加えて、「ホワイトカラーダミー」と「年上有ダミー」の交互作用項を投入した結果である。交互作用項を投入すると、ホワイトカラーダミーと年上有ダミーの係数が有意ではなくなり、「ホワイトカラーダミー×年上有ダミー」の係数が 10%水準で有意となる。つまり、保護者がホワイトカラー職であることと年上のきょうだいいることは単独で「文章力」を高める要因とはなりえず、双方がそろうことで「文章力」を高めるようになると考えることができる。

表 5　交互作用項を投入した重回帰分析の結果（従属変数＝「文章力」：強制投入法）

	モデル1			モデル2			モデル3		
	B	β	*p*	B	β	*p*	B	β	*p*
（定数）	38. 16		***	54. 16		***	43. 07		***
ホワイトカラーダミー	24. 11	0. 34	***	4. 71	0. 07		20. 19	0. 28	*
女子ダミー	17. 59	0. 27	*	20. 51	0. 31	**	18. 05	0. 27	+
年上有ダミー	17. 49	0. 27	*	-6. 97	-0. 10		10. 71	0. 16	
ホワイトカラー×年上有				30. 84	0. 39	+			
女子×年上有							7. 72	0. 09	
調整済みR^2	0. 165			0. 179			0. 138		
n	70			70			70		

+*p*<. 10,　**p*<. 05,　**p<. 01,　****p*<. 001

また、「女子ダミー」と「年上有ダミー」の交互作用項を投入したモデル 3 では、年上有ダミーが有意ではなくなったが、係数の正負の傾向については大きな変化は見られなかった。一方で、「女子ダミー×年上有ダミー」については、係数はプラスであるが有意とはならなかった。つまり、統計的有意性を判断基準とすると、性別と年上のきょうだいの交互作用による「文章力」への影響は認められないことになる。

サンプルサイズが大きくなれば結果は変わるかもしれないが、これまでの結果から年上のきょうだいの存在と「文章力」の関係は、ホワイトカラー家庭で限定的に確認される可能性が高いと言えそうである [1)]。

5．おわりに

5-1. 結果のまとめ

本稿で得られた知見について、当初に設定した課題に応える形で簡単にまとめておこう。

（課題 1）：年上のきょうだいの存在は、「文章力」を高めるのか。

結論的に述べるならば、「高まる」と言える。本人の属性や保護者の階層的属性を統制しても、年上のきょうだいがいる方が「文章力」は高い。ただし、（課題 2）の結果を踏まえると、一概にそうとは言えない。

（課題 2）:「書く力」に対するきょうだいの影響は、本人の性別や保護者の属性により異なるのか。

保護者職業・本人の性別と年上のきょうだいの有無の交互作用を確認した結果、ホワイトカラー職の家庭において年上のきょうだいがいることで「文章力」が高まる可能性が明らかになった。つまり、（課題 1）で述べた年上のきょうだいの影響は、ブルーカラー職の家庭では確認されず、限定的なものであったことを示している。さらに、ホワイトカラーダミーの単独の効果も認められなくなることから、年上のきょうだいがいた場合のみ、社会階層的要因が顕在化すると言うこともできる。

また、先行研究と同様に、女子ダミーが一貫して正の影響を与えていたことは興味深い。日本においては、「女子は文系」という言説が一定程度存在するが、PISA の読解力が女子の方で高いこと（国立教育政策研究所編 2013）や、国語という教科がジェンダー化されている（伊佐・知念 2014）ということが指摘されている。そうした現象の原初的な現れとして本調査の結果を捉えることも可能であろう。ただし、「文章力」が女子で高いことの理由は定かではない。家庭内の養育プロセスにジェンダーによる違いがあったり、たとえば、「女子は小さい頃から手紙でやりとりを行う」といった友人関係のあり方（横山・秋田・無藤・安見 1998）の違いがあったりすることが考えられるが、いずれも本稿の目的の範疇を超える問いである。今後の課題の一つとしたい。

5-2. 考察

さて、年上のきょうだいの存在が「文章力」を高めるプロセスには、どんなものが想定されるだろうか。単純に考えると、直接的効果と間接的効果に分けることができそうである。すなわち、直接的効果として、先行研究が明らかにしたように、年上のきょうだいと接することによって、子どもはロールモデルを獲得し、社会化やスキルの習熟が促されることが考えられる。特に、「小学校」という「世界」で過ごしている年上のきょうだいの存在が、大きな刺激となることは想像に難くない。また、間接的効果として、家にペン・ノート・消しゴムといった一連の文字を書く道具がそろっていたり、年上のきょうだいが使用した「ひらがな表」などが残っていて、より幼少の頃よりそれに触れていたり、といったことも考えられる。そういった環境面の充実に加えて、保護者自身が文字を書かせる「コツ」のようなものを会得し、それを実践するようになったから、という理由も想定できる。いずれも推測の域を出ないが、それぞれが複合的に作用しているのではないだろうか。

ただし、本稿が指摘する重要なポイントは、そうした作用がホワイトカラー職の家庭でのみ生じている可能性が高いというものであった。いったいそれはなぜだろうか。

おそらく、ホワイトカラー職の家庭では、「文章力」に関する年上のきょうだいの影響が最大化するような土壌があると思われる。たとえば、片瀬（2006）が「ハビトゥスとしての『読書の力』」を定義したことを参考にすると、ホワイトカラー職の保護者は「ハ

ビトゥスとしての『書く力』」を豊富に有していると考えることができる。そして、年上のきょうだいが学校に入学し、「ハビトゥスとしての『書く力』」を獲得し始めると、家庭内の「書く力」の総量が高まり、それが入学前の子どもにも影響を与えた可能性もある。

また、それに関連して、「ハビトゥスとしての『書く力』」が豊富なホワイトカラーの家庭では、「書く」という行為に対してブルーカラーの家庭以上に重い価値が置かれているのかもしれない。それゆえ、ホワイトカラーの家庭では年上のきょうだいの影響を素直に受けて「書く力」が高まるのに対し、ブルーカラーの家庭では「書く」ことの重要度が異なるために「真似するべきこと」とはなっていないのかもしれないのである。

5-3. 本研究の限界と課題

本研究の知見は、小さなサンプルに対する分析から導かれたものである。その結果、統計的有意性を判定する過程で、微妙な結果を「非有意」として切り捨ててしまった感は否めない。その点に限界と今後の課題を見出すことができるだろう。

また、きょうだいを把握する方法が粗く、きょうだい数はおろか、出生順位、きょうだいの性別、その組み合わせ、出生間隔などについてはまったく検討できていない。きょうだい関係の厳密さを求めればキリがなくなってしまうが、この点も今後の課題として位置付けることができるだろう。

さらに、5-2. で考察したような、年上のきょうだいの存在がどのように子どもの「文章力」の育成につながるのかという点についても大きな課題が残されている。今後、観察法などの質的方法を組み合わせることも含め、研究のデザインを構築する必要があるだろう。

以上のような限界や課題があるとは言え、一般的に「出生順位が遅いと教育的に不利」とされている状況において、ホワイトカラー職の家庭限定とは言え、「出生順位が遅いと有利」とも捉えられる結果が出たことは非常に興味深い。この「ねじれ」の問題を解き明かしていくことは、年少時における今後のきょうだい研究を大いに発展させることであろう。本研究は、現代社会における、きょうだい関係が子どもに与えるさまざまな影響の一端を捉えたにすぎないが、多くの可能性を拓いたという意味で、重要な意義があると考える。そしてまた本稿の知見を格差論という観点から見ると、きょうだい関係を媒介として階層間格差が生成される可能性を示唆するものでもある。その意味でも本稿の試みには、意義があったと言えるのではないだろうか。

少子社会において、「きょうだい」という子ども同士の関係は、今後ますます重要な意味を帯びるかもしれない。小さい研究であっても、それの蓄積によって、子どもが生きる「きょうだい」という社会の全体像を明らかにすることが求められるだろう。

注

1）同様の結果を、以下の図 1 でも確認しておこう。年上のきょうだいがいない（長子で

ある）場合は、保護者職業の違いによる文字数の差異の分布に大きな違いはないが、年上のきょうだいがいる場合には、保護者の職業の違いで文字数の分布に大きな差異生じていることがわかる。

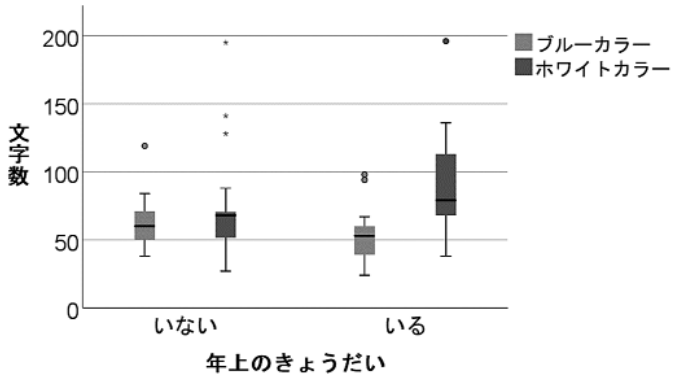

図１　年上きょうだい×保護者職業×文字数

引用文献

Barr, R., & Hayne, H.,(2003), It’s not what you know it’s who you know: Older siblings facilitate imitation during infancy. *International Journal of Early Years Education*, 11, pp.7-21.

Benesse 教育研究開発センター (2009),『第 3 回子育て生活基本調査報告書』

藤原翔 (2012),「きょうだい構成と地位達成」,『ソシオロジ』174, 41-57 頁

Harris, J. R., (1998), *The nurture assumption: Why children turn out the way they do*. Free Press（=2000,『子育ての大誤解』, 石田理恵訳 , 早川書房）

猪俣朋恵・宇野彰・酒井厚・春原則子 (2016),「年長児のひらがなの読み書き習得に関わる認知能力と家庭での読み書き関連活動」,『音声言語医学』57, 208-216 頁

伊佐夏実・知念渉 (2014),「理系科目における学力と意欲のジェンダー差」,『日本労働研究雑誌』648, 84-93 頁

片瀬一男 (2006),「ハビトゥスとしての『読書の力』」,『東北学院大学教育研究所報告集』第 6 集 , 24-54 頁

国立国語研究所 (1964),『小学生の言語能力の発達』明治図書

国立教育政策研究所編 (2013),『生きるための知識と技能 5』明石書店

近藤博之 (1996),「地位達成と家族」,『家族社会学研究』No.8, 19-31 頁

仲真紀子 (1997),「記憶の方法：書くとよく覚えられるか？」,『遺伝』51(1), 25-29 頁

太田静佳･宇野彰･猪俣朋恵 (2018),「幼稚園年長児におけるひらがな読み書きの習得度」,『音声言語医学』59, 9-15 頁

Shanahan L, McHale SM, Osgood DW, Crouter AC., (2007), Conflict with mothers and fathers from middle childhood through adolescence, *Developmental Psychology*. 43: pp.539–550.

島村直己・新名主健一・米田猛 (2004),「作文の文章量の発達」,『日本教育心理学会総会発表論文集』46, 246 頁

Smith, T.,(1993), Growth in academic achievement and teaching younger siblings. *Social Psychology Quarterly*, 56, pp.77-85.

苫米地なつ帆 (2012),「教育達成の規定要因としての家族・きょうだい構成ージェンダー・出生順位・出生間隔の影響を中心に」, 東北社会学会編『社会学年報』第 41 号 , 103-114 頁

苫米地なつ帆 (2013),「キョウダイの教育達成格差が生じるメカニズムの理論的考察」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』62(1), 69-87 頁

内田伸子 (2012),「日本の子育ての格差」, 内田伸子・浜野隆編著『世界の子育て格差 : 子どもの貧困は超えられるか』金子書房 , 1-18 頁

依田明 (1967)『ひとりっ子・すえっ子』大日本図書

依田明 (1990)『きょうだいの研究』大日本図書

横山真貴子・秋田喜代美・無藤隆・安見克夫 (1998),「幼児はどんな手紙を書いているのか？：幼稚園で書かれた手紙の分析」,『発達心理学』9(2), 95-107 頁

The Effect of Older Siblings on the Ability to Write Longer Essays

Yusaku MAEBA

This paper aims to clarify older siblings' influence on the numbers of words in children's essays.

It is essential for first grade children to be familiar with writing. Previous research has shown that learning experiences of writing are connected to writing ability and that girls have more advanced writing skills than boys. However, it is not clear whether older siblings have an impact on children's ability to write essays. This paper examines that question, and, if there is such an impact, whether there is an interaction effect between the older siblings and certain social attributes.

The dataset was composed of essays for first glade children and questionnaires for their parents. The students were asked to write the essays five months after entering elementary school.

This study used multiple regression analysis with the "number of words in the essay" as the dependent variable and with social attributes as the independent variables.

Results show that the existence of older siblings increases the numbers of words for children's essays. However, this may be limited to children from white-collar families because of the interaction between white-collar families and older siblings.

These findings have implications for the processes to increase social inequality in elementary schools.